京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成28年　4月25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局　地球環境学堂

職　　名　学堂長

氏　　名　舟川晋也

助成の種類	**平成27年度　・　社会連携助成**	
事業名	平成27年度　京都大学地球環境フォーラムおよび嶋臺塾の実施	
実施期間	平成27年5月24日　～　平成28年3月7日	
実施場所	京都大学時計台記念館百周年記念ホール、北部総合教育研究棟益川ホール、嶋臺塾	
参加者	総数 351名	内訳 地球環境フォーラム　247名、嶋臺塾　104名
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　■ 有(嶋臺塾記録等)	

会計報告

事業に要した経費総額	2,100,000円
うち当財団からの助成額	2,100,000円
その他の資金の出所	(機関や資金の名称)

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
会場借料		53,700
印刷製本費		1,068,768
謝金		519,280
通信運搬費		17,890
委託費		231,499
消耗品費等		208,863
合計		2,100,000

当財団の助成について

(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)

貴財団のご支援により、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を各3回開催しました。毎回それぞれおよそ100名、60名程度と安定した参加者があり、京都大学の環境問題に関する研究成果を発信する場として、市民の間でも定着したものと言えます。また、嶋臺塾については、「記録」を紙媒体で編集・出版し、広く配布することができました。地球環境学堂にとっても、市民や外部の研究者との対話を通じて、今後の教育研究に役立つフィードバックを得ることができました。今後も引き続きご支援を賜ります様、お願い申し上げます。

成 果 の 概 要

京都大学大学院地球環境学堂長　舟川　晋也

京都大学大学院地球環境学堂では、教育研究成果を学内外へ発信し、その成果に基づいて今後の社会の在り方を市民と共に考え、その共同作業の結果を教育研究活動にフィードバックさせるために、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を開催している。地球環境フォーラムでは、大学内外の研究者からの話題提供の後に参加者も交えて広く議論する場としている。嶋臺塾は会場も伝統的な京町家として、「衣食住」など生活文化につながるテーマについて、本学教員と京の伝統文化を支える文化人による話題提供を受け、参加者全員で語り合う場を創りあげている。このように、アカデミックなテーマについて議論する場と、暮らしに密着したテーマについて語る場を提供することによって、最新の地球環境学の成果の共有と、地球環境をめぐる社会連携への展開をはかっている。

平成 27 年度は第 22 回から第 24 回まで計 3 回の地球環境フォーラムを開催した。

第 22 回は、「西アフリカ・サバンナ帯の人と自然」をメインテーマに、真常仁志（地球環境学堂准教授）「砂漠化対処への地球環境学の挑戦」、前野ウルド浩太郎（京都大学白眉センター助教）「破滅の化身『バッタ』との闘い － サハラの静寂を守るため」、若月利之（島根大学名誉教授）「アフリカ水田農法とアジア・アフリカ連携」の 3 つの講演と総合討論を行った。言葉も文化も異なる西アフリカで調査研究や技術の普及を行うことの困難性や、移転しようとする研究手法や技術がなかなか定着しないなどの点が語られた。サバクトビバッタの大群の映像は観る者に強い印象を与え、食料として利用できないのかという質問が複数の参加者から出た。西アフリカという地域の問題が地球全体の問題へとつながっていて、解決のために私たちにどのようなことが出来るのかを考えるきっかけとなるフォーラムであった。

第 23 回は、「地域消滅を考える」というテーマで藤山浩（島根県中山間地域研究センター 主幹）「中山間地域に求められる「田園回帰」戦略と島根県の取り組み」、 星野 敏（京都大学地球環境学堂教授）「『農村再生』の現状と課題」、堀田聰子（国際医療福祉大学大学院教授）「地域包括ケアと共生のまちづくり」の 3 つの講演と総合討論を行った。総合討論での相互質疑やフロアからの質疑を通じて、地方消滅をめぐる課題を克服するには、地方からのボトムアップでの取り組みとその取り組みを可能にする制度構築が不可欠であることが明確になった。

第 24 回では「生物が空気環境を感じる意味」と題して、森泰生（京都大学 地球環境学堂 教授）「動物にとっての酸素が持つ存外に微妙な意味」、三浦恭子（北海道大学 遺伝子病制御研究所 講師）「アフリカの地下に住むハダカデバネズミ －老化耐性・がん化耐性の不思議－」、松浦健二（京都大学 農学研究科 教授）「シロアリの社会構造の進化と化学コミュニケーション」の 3 つの講演と総合討論を行った。低酸素環境で生活する動物の生理機能を生物進化の観

点から解説されるとともに、普段はなじみのない珍しい動物の生態が動画などもまじえて紹介され、多くの参加者の興味をひいた。どのようなきっかけでこうした珍しい生物の研究テーマに取り組むようになったのかなどの質問が会場から寄せられた。

8 年目を迎えた地球環境フォーラムには毎回ほぼ 100 名に近い参加者があり、地球環境問題を様々な角度から分かりやすく市民に伝える場として定着したと言える。高校生など若年層の参加者が増えているのが近年の傾向である。

嶋臺塾の平成 27 年度の活動として、まず、平成 26 年度に行った 3 回の嶋臺塾の記録を編集し、500 部を印刷、約 400 部を配布した。続いて、「畳」「町並み」並びに「朽ちる」をテーマとした 3 回の嶋臺塾を開催し、延べ 104 名の参加者を得た。

初回（第 33 回）は、「何処に御座る」と題し、日本の畳文化について考えた。畳は日本文化の象徴ともいえるが、現在、畳部屋の無い家が増え、畳の需要は、平成の間に 3 割程度にまで減ってしまい、その減少に歯止めがかかっていない。畳師の磯垣昇さんからは、畳の歴史、畳職人の技術、畳の品質とその変容についての解説があり、珍しい畳や高級品の備後表などの実物を見せてもらいながら、本当に良質な畳とはどんなものか、調湿性のない現代家屋との関係についても考えさせられた。学堂の吉野准教授からは、畳表の原料となる藺草生産の話があった。藺草の産地と言えば、かつては備後表で有名な広島県、そして岡山県だったが、それが、高度経済成長期に熊本県に移動し、近年は中国からの輸入に代替されてきた。こうした藺草産地の移動や藺草農家の格闘の様子をたどりながら、戦後日本農業がたどってきた道のりや、私たちの畳に対する見方への影響が語られた。

第 34 回は、「京のたたずまい」と題し、京都の景観について考えた。最初に、京都先斗町に大正の頃から店を構えておられる「すきやきいろは」の四代目 楠南草一郎さんに登壇いただき、先斗町の景観づくりについてお話しいただいた。先斗町が観光地化され、歩く人も出店する人も往時とは変わってきた。その中で、「先斗町まちづくり協議会」が発足し、「先斗町らしさ」について再考が行われるようになった。近くの小学校旧校舎に先斗町町南北 600 メートルすべての建物の立体図や古地図、絵図が展示されてると、そこにさまざまな人が集い、語り、記憶や記録を残した。そうした記録は、スマートフォンのアプリを使って、実際の景観と重ね合わせて表示できるようになった。古い記憶をよみがえらせながら、新しい技術も取り入れながら、次世代の「先斗町らしさ」を形作っていく。植南さんからは、そうした取り組みについてのお話しだった。人間・環境学研究科の中嶋節子教授からは、京町家で形づくられる京都の景観をテーマに、京町屋が描かれた最古の絵画史料「年中行事絵巻」に始まり、さまざまな史料から、いかに町家が誕生して変遷し、京都の町並み形づくられていったかについて解説いただいた。整然とした京都の町並みは、すでに江戸時代には形成されていたが、それは、建築技術の規格化や行政的指導もあったが、最も強かったのは当時形成された自治組織「町」による成文・不成文の規律であり、町（ちょうなみ）並みが町（まち）並みをつくったというお話

だった。

第 35 回は、「朽ちる美」と題し、グラフィックデザイナーの山本剛史さんと地球環境学堂の真常仁志准教授にお話しいただいた。安定的な物質が私たちの生活を便利にしていることは認めながらも、そのことが地球環境に大きな負荷を与えている。朽ちることの大切さを知り、朽ち行くことを受け入れ、生活の中にとりいれる術について考えた。山本さんからは、自らが京都・京北に古民家を購入し、手直ししながら自分にとって心地よい生活空間をつくってこられた。土塀も版築という技法で修復され、苔むした庭も再生された。そこには、古い知恵に学び、古いものを大切にするという姿勢がある一方で、古び行くもの朽ちゆくものの美しさを愛でる美意識を感じた。そのことの共感する人も多く、版築の作業には 200 人ほどの人が集まったという。真常さんからは、土壌学者の立場から、土とは何か、土はどうやって形成され、人や生物と関わっているかについてお話しいただいた。土にとって「朽ちる」ことは始まりであって、朽ちないと何も始まらない。我々は土に生かされているので、土をうまく使わないと人間の生活が苦しくなる。自身が取り組んでおられる砂漠化とその解決方法など、現在地球上で起きている環境問題を取り上げ、土を知り土の声に耳を傾けることの大切さについてお話しいただいた。

いずれの回も会場からの活発な発言があり、京町屋を舞台に、研究者と市井の実践家、洛中のみなさんと地球環境の今と生活文化のあり様について深く考えることができた。